

譬喩品九箇の大事

第一 譬喩品の事 文句の五に云はく「譬とは比況なり、喩とは曉訓なり
大悲息まず巧智無辺なれば更に樹を動かして風を訓へ扇を挙げて月を喩す」と。

御義口伝に云はく、大悲とは母の子を思ふ慈悲の如し。今日蓮等の慈悲なり。章安の云はく「彼が為に悪を除くは即ち是彼が親なり」と。巧智とは南無妙法蓮華経なり。諸宗無得道の立義なり。巧於難問答の意なり。更とは在世に次いで滅後の事と意得べきなり。樹を動かすとは煩惱なり、風を訓ふるとは即ち菩提なり。扇を挙ぐとは生死なり、月を喩すとは即ち涅槃なり。今日蓮等の類南無妙法蓮華経と唱へ奉る時、大白牛車に乗じて直至道場するなり。記の五に云はく「樹と扇と風と月とは唯円教の理なり」と。又云はく「法説の実相は何ぞ隠れ、何ぞ顕はれん。長風息むこと靡く空月常に懸かれり」と。此の釈之を思ふべし。隠とは死なり、顕とは生なり、長風とは我等が息なり、空月とは心月なり。法華の生死とは三世常恒にして隠顕之無し。我等が息風とは吐く処の言語なり。是南無妙法蓮華経なり。一心法界の覚月常住にして懸かれり。是を指して唯円教の理と釈せり。円とは法界なり、教とは三千羅列なり、理とは実相の一理なり云云。

第二 即起合掌の事 文句の五に云はく「外儀を叙すとは、即起合掌は身の領解と名づく。昔は権実二と為す。掌の合せざるが如し。今は権即実と解す。二の掌の合するが如し。向仏とは昔の権は仏因に非ず、実は仏果に非ず。今権即実と解して大円因を成ず。因は必ず果に趣く、故に合掌向仏と言ふ」と。

御義口伝に云はく、合掌とは法華経の異名なり。向仏とは法華経に値ひ奉るを云ふなり。合掌は色法なり、向仏は心法なり。色心二法妙法と開悟するを歡喜踊躍と説くなり。合掌に於て又二の意之有り。合とは妙なり、掌とは法なり。又云はく、合とは妙法蓮華経なり、掌とは廿八品なり。又云はく、合とは九界、掌とは仏界なり。九界は権、仏界は実なり。妙楽大師の云はく「九界を権と為し仏界を實と為す」と。十界悉く合掌の二字に納まって森羅三千の諸法合掌に非ざること莫きなり。総じて三種の法華の合掌之有り。今の妙法蓮華経は三種の法華未分なり。爾りと雖も先づ顕説法華を正意と為すなり。之に依って伝教大師は「於一仏乘とは根本法華の教なり 妙法の外更に一句の余経無し」と。向仏とは一々文々皆金色の仏体と向かひ奉る事なり。合掌の二字に法界を尽くしたるなり。地獄・餓鬼の己々の当体其の外三千の諸法其の偪合掌向仏なり。而る間法

界悉く舍利弗なり。舍利弗とは法華經なり。舎とは空諦、利とは假諦、弗とは中道なり。円融三諦の妙法なり。舍利弗とは梵語、此には身子と云ふ。身子とは十界の色心なり。身とは十界の色法、子とは十界の心法なり。今日蓮等の類南無妙法蓮華經と唱へ奉る者は悉く舍利弗なり。舍利弗は即ち釈迦如来、釈迦如来は即ち法華經、法華經は即ち我等が色心の二法なり。仍つて身子此の品の時間此法音と領解せり。聞とは名字即、法音とは諸法の音なり。諸法の音とは妙法なり。爰を以て文句に釈する時「長風息むこと靡し」と。長風とは法界の音声なり。この音声を信解品に「以仏道声令一切聞」と云へり。一切は法界衆生の事なり。此の音声とは南無妙法蓮華經なり。

第三 身意泰然 快得安穩の事 文句の五に云はく「從仏は是身の喜びを結するなり。聞法は是口の喜びを結するなり。断諸疑悔は是意の喜びを結するなり」と。

御義口伝に云はく、身意泰然とは煩惱即菩提・生死即涅槃なり、身とは生死即涅槃なり、意とは煩惱即菩提なり、從仏とは日蓮に從ふ類等の事なり、口の喜びとは南無妙法蓮華經なり、意の喜びとは無明の惑障無き故なり。爰を以て之を思ふに、此の文は一心三觀一念三千我等が即身成仏なり。方便の教は泰然に非ず、安穩に非ざるなり。行於險徑多留難故の教なり。

第四 得仏法分の事

御義口伝に云はく、仏法の分とは初住一分の中道を云ふなり。迹門初住本門二住已上と云ふ事は此の分の字より起こるなり。所詮此の分の一字は一念三千の法門なり。其の故は地獄は地獄の分にて仏果を証し、乃至三千の諸法己々当体の分にて仏果を証したるなり。眞実の我等が即身成仏なり。今日蓮等の類南無妙法蓮華經と唱ふる分にて仏果を証したるなり。分とは権教は無得道、法華經は成仏と分かつと意得べきなり。又云はく、分とは本門寿量品の意なり。己々本分の分なり。總じて迹門初住分証とは教相なり。眞実には初住分証の処にて一經は極まりたるなり。

第五 而自廻轉の事 記の五に云はく「或は大論の如し。經に而自廻轉と云ふは、身子得記を聞き法性自然にして轉じ、因果依正自他悉く轉ずるを表はす」と。

御義口伝に云はく、草木成仏の証文に而自廻轉の文を出だすなり。是一念三千の依正体一の成仏を説き極めたるなり。草木成仏の証人とは、日蓮等の類南無妙法蓮華經と唱へ奉るを指すなり。廻轉とは題目の五字なり。自とは我等行者の事なり。記の五の釈能く能く之を思ふべし云云。

第六 一時俱作の事

御義口伝に云はく、一時とは末法くさの一時なり、俱作とは南無妙法蓮華經なり、俱とは畢ひつきょう竟住一乘なり。今日蓮等の類の所作には題目の五字なり。余行を交へざるなり。又云はく、十界の語言は一返の題目を俱作したり。是豈感応に非ずや。

第七 以譬喻得解の事 止観五に云はく「智とは譬に因るに斯しるしの意徴有り」と。

御義口伝に云はく、此の文を以て鏡像きやうぞうえんゆう円融の三諦の事を伝ふるなり。総じて鏡像の譬へとは自浮自影じふじようの鏡の事なり。此の鏡は一心の鏡なり。総じて鏡に付いて重々の相伝之有り。所詮鏡の能徳とは万像を浮かぶるを本とせり。妙法蓮華經の五字は万像を浮かべて一法も漏るゝ物これ之無し。又云はく、鏡に於て五鏡之有り。妙の鏡には法界の不思議を浮かべ、法の鏡には法界の体を浮かべ、蓮の鏡には法界の果を浮かべ、華の鏡には法界の因を浮かべ、經の鏡には万法の言語を浮かべたり。又云はく、妙の鏡には華嚴を浮かべ、法の鏡には阿含を浮かべ、蓮の鏡には方等を浮かべ、華の鏡には般若を浮かべ、經の鏡には法華を浮かぶるなり。順逆次第して意得べきなり。我等衆生の五体五輪妙法蓮華經と浮かび出でたる間、宝塔品を以て鏡と習ふなり。信謗の浮かび様能く能く之を案ずべし。自浮自影の鏡とは南無妙法蓮華經是なり云云。

第八 唯一門の事 文句の五に云はく「唯一門とは上の以種々法門、宣示じおぶつどう於仏道に譬ふ〇門たくもんに又二あり。宅門と車門となり。宅とは生死なり、門とは出づるようろ要路なり。此は方便教の詮なり。車とは大乘の法なり、門とは円教の詮なり」と。

御義口伝に云はく、一門とは法華經の信心なり、車とは法華經なり、牛とは南無妙法蓮華經なり、宅とは煩惱じしんほつしやうなり。自身法性めくの大地を生死生死と転り行くなり云云。

第九 今此三界等の事 文句の五に云はく「次に今此三界より下第二に一行半は、上の所見しよじゆじやういしやうろふじやうしししよじやうしや、諸衆生為生老病死之所燒煮を頌して第二の所見、火の譬へを合す。唯我一人ゆいがいちにんより下第三に半偈は上の仏見此已便作是念を頌して驚入火宅きやうにゆうかたくを合するなり」と。

御義口伝に云はく、此の文は一念三千の文なり。一念三千の法門は、迹門には生陰しやうおん二千の世間を明かし、本門には国土世間を明かすなり。又云はく、今此三界の文は国土世間なり。其中衆生の文は五陰世間なり。而今此處多諸患難にこんししよたしよげんなん 唯我一人の文は衆生世間なり。又云はく、今此三界は法身如来なり。其中衆生悉是吾子は報身如来なり。而今此處は応身如来なり。